



豊かな子

明るく、思いやりのある子
夢に向かって、自ら学ぶ子
身体を鍛え、最後までやりぬく子



6年修学旅行

初冬の爽やかな天候のもと、諫小6年生修学旅行団は、元気いっぱい、笑顔いっぱいで旅を終えることができました。

自分の五感を使って、見聞を広げる体験は、すべてが新鮮で、一生心に残り続けるものとなったことでしょう。**真剣な態度、表情で見学や活動に臨む子どもたちの姿**に、多くの講師の先生方からお褒めの言葉をいただきました。また、仲間と協力して行動する班活動も、**声をかけ合い、支え合って行動できていました**。さすが、諫小の最上級生です。

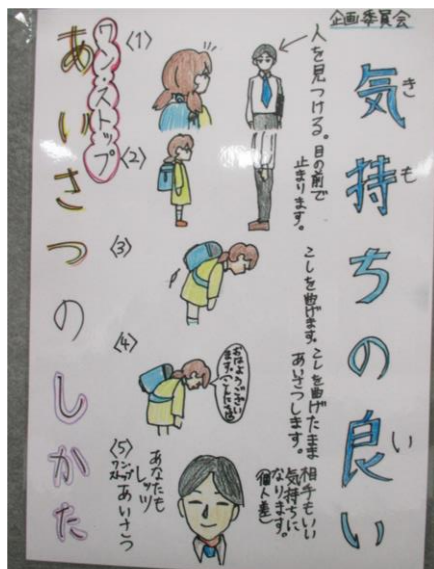


今後、人権集会、頌徳祭、マラソン大会等、人間性や生きる力を高める行事が続きます。**年が明けると、卒業式がもう目の前**。一日一日を大切に、伸ばす力はしっかり伸ばし、高めていかねばならないと、改めて思いを深めました。



ワンストップあいさつ拡大中

生徒指導基本方針にあります「**爽やかな朝のあいさつ・ワンストップあいさつ**」に、子どもたちが取り組んでいます。子ども間の温かい絆が拡大中です。



- 3 (火) 児童集会 (学習委員会)
- 4 (水) 諫早中制服採寸
- 8 (日) 頌徳祭・レジャヅヨイ152
- 9 (月) 振り替え休日
- 10 (火) ~ 児童個人面談開始
- 11 (水) 2~6年標準学力調査 (国・算)
- 13 (金) 避難訓練 (不審者対応)
- 17 (火) マラソン大会 (予備：19木)
- 20 (金) 模擬選挙講座 (6年)
- 24 (火) 冬休み前集会 (給食あり)

シリーズ親学「子どもに生きる力をつけさせるために」③

自分の子さえよければ

ある母親が息子の就職のことであつたところへきました。以下はその母親の言い分。

「うちの息子は一人息子で、よそ様の子と違いまして大事に育てましたので、あんまり骨の折れることや、身体を荒っぽく使う仕事には向かないと思うんです。それに小さな会社や工場ですといつ倒産するかわからず不安ですから、できれば倒産のない大きな会社か役所のようなところが一番適当かと思うんですが、相田さんのお顔でどこか安定したいいい職場をお世話していただければと思いますよ……」

「ほう、ほう、ほう」

聞いてるわたしの顔がほてるような思いでしたが、これが世の親たちの本音かも知れません。母親の話を要約すると、

一、わが子にはなるべく骨を折らせたくない。

その反対に他人の子ならいくら骨折ってもかまわぬ。

二、わが子には一生安楽な生活をさせたい。途中で倒産なんていう不安な思いをさせたくない。他人の子ならかまわぬ。

ようするに、自分の子だけはラクして、いっぱいお金もらって、カッコいい生活をさせたい。他人の子はどつても。

なんとも身勝手な話ですが、これがどうやら世間一般の母親たちの平均のようです。この母親の心の底には「親の苦労は子にさせたくない」というせつない気持ちがあるわけで「概に否定できませんが、こういう母親のエゴが結果的には子供自身をみんなダメにしている」とわたしは断言いたします。自分の子さえ幸せならば他人の子はどうなつてもいい、この母親の自分勝手。その母親の姿勢がそつくりそのまますべてにわたって、自己中心的な、我がままなブレイキのきかない現代っ子を作っているんです。つまり、母親そつくりの子供になつていくわけです。そこでわたしは世の母親たちへ次のことを訴えます。

一、ラクしてカッコよければしあわせか、ということ。逆に骨を折ることは不幸かということ。人間のほんとうの幸せとはいつたいなんだ、ということ。

わたしは、人間のほんとうの幸せとは、充実感のある生き方だと思つています。骨を折らない、つまり、努力を必要としない仕事に充実感はありません。山登りに生き甲斐を感じるの、山登りが大変だからです。ラクじゃないからです。ラクじゃないから充実感があるんです。

二、普通の順序でゆく限り、子供は親亡きあと一人で生きてゆくということ。親亡きあとどんな苦労にぶつかるとかわからぬということ。

三、子供は将来を生きる、ということ。そして将来のことは何人にも予想がつかぬ、ということ。

終戦前後のあの混乱期に、三十数年後の今日の世の中を誰が予測できたでしょう。私自身、敗戦で軍隊から帰つてきた当時、全家庭にテレビや自動車のある生活など夢にも想像できませんでした。況やお月さまに人間がゆくなんてことを。それと同じで、わが子が一人前の大人になつて活躍しなければならぬ二十年、三十年先の世の中がどう変つてゆくか予測できるものは一人もいません。つまりどう変るかわからない将来を生きゆく、それが子供です。したがつて将来、子供がどんな苦難に遭遇するかはまったく予想できぬということ。わが子には苦労させたくない」と母親のエゴでいくら思つても、親亡き後親よりも苦労をすることがいっぱいあるかも知れない、そのように腹をすえて子供の将来を見透すべきです。そこで言えることは、たとえ、親よりも苦労することがあつても、親よりもたくましく、親よりも根張り強く、人生を生きぬいてゆく力と智慧を子供に与えておく、それが一番正しい親の愛情であり、義務であるとわたしは思ひます。

負ける練習

そのためにはどうしたらいいか。結論から先に言います。負ける練習、恥をさらす訓練、カッコの悪い体験を、できるだけ多く子供にさせておくことです。人間の身体は使つたところが強くなります。これは至極単純な原理です。その反対、使わぬところはどんどん弱くなります。現代っ子にとつて一番弱いところはどこか。負けに耐える心、恥に堪える心、カッコ悪さに堪える心です。負けるということとは自分の思いが通らぬことです。自分の思いが通らぬ時、子供は次の二つのうち、どちらか一つの行動をとります。

一、じつとがまんして自分の欲望にブレイキをかける。

二、だだをこねて思いを通す

世の母親は大体において後者で、大事に大事にだだをこねさせて子供の思いをみんな通させる。年寄りのいる家ではそれに拍車がかかる。いわゆる過保護様々です。つまり、子供がガマンをする体験、ガマンをする機会を、親自身の手でみんな取り上げてしまふのです。そしてわずかなことにもガマンのできない、ブレイキのきかない、我がまま放題な子供を作り上げておいて、しかもその子に「全手を焼いて」というのが大方の現状です。長い人生には自分の思いが通らぬ場合がたたくさんあります。思うようにならぬのが世の常であり人生です。むしろ、自分の思うようにならぬほうがはるかに多いのが人生です。それならば人生の的を思うようにならぬ方に合わせるべきです。思うようにならぬそれは、ことを代えれば負けることです。カッコよく勝つことではありません。自分の思い通りカッコよく勝つことは人生ではごく稀です。だから人生の的を確率の少ない「勝つこと」に合わせないで、確率の多い「負ける」ほうに合せておくことです。それが負ける練習です。小さい時から負ける練習をさせておけば、成人してから負ける人間になれます。失敗してもへこたれないたくましい人間になれるはずなんです。人生におけるどんな波風、どんな屈辱にも堪えてまっ直ぐに自分の道を歩いてゆけるような、しっかりと「いのちの根」を作つておいてやる、それが本当の愛情だと思います。ラクしてカッコいいこと、つまり、勝つことばかり考えて、過保護に育てられた子供は、その分だけ「いのちの根」が浅く、親亡き後の本人の負担が大きいことを知るべきです。

「にんげんだもの（相田みつを）」引用

わたしも3人の子を育て上げた親です。独立した子どもらを見てみると、「今の社会で生きていくには、たくましい心と頭と体が必要だな」と、いつも感じています。「甘やかして育てなくてよかった」とも思います。

『まっすぐに自分の道を歩いて行けるようにしっかりとした「命の根」を作つてやることこそ、親の本当の愛情』、みつをさんの言葉が、実感をもって理解できます。